

主日礼拝説教「あなたと顔を合わせる日のために」 予稿
日本基督教団石神井教会 2026年9月27日

【旧約聖書日課】創世記 32章23～33節

²³その夜、ヤコブは起きて、二人の妻と二人の側女、それに十一人の子供を連れてヤボクの渡しを渡った。²⁴皆を導いて川を渡らせ、持ち物も渡してしまうと、²⁵ヤコブは独り後に残った。そのとき、何者かが夜明けまでヤコブと格闘した。²⁶ところが、その人はヤコブに勝てないとみて、ヤコブの腿の関節を打ったので、格闘をしているうちに腿の関節がはずれた。²⁷「もう去らせてくれ。夜が明けてしまうから」とその人は言ったが、ヤコブは答えた。「いいえ、祝福して下さるまでは離しません。」²⁸「お前の名は何なのか」とその人が尋ね、「ヤコブです」と答えると、²⁹その人は言った。「お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ。」³⁰「どうか、あなたのお名前を教えてください」とヤコブが尋ねると、「どうして、わたしの名を尋ねるのか」と言って、ヤコブをその場で祝福した。³¹ヤコブは、「わたしは顔と顔を合わせて神を見たのに、なお生きている」と言って、その場所をベヌエル(神の顔)と名付けた。

³²ヤコブがベヌエルを過ぎたとき、太陽は彼の上に昇った。ヤコブは腿を痛めて足を引きずっていた。³³こういうわけで、イスラエルの人々は今でも腿の関節の上にある腰の筋を食べない。かの人がヤコブの腿の関節、つまり腰の筋のところを打ったからである。

【使徒書日課】コロサイの信徒への手紙 1章21～29節

²¹あなたがたは、以前は神から離れ、悪い行いによって心の中で神に敵対していました。²²しかし今や、神は御子の肉の体において、その死によってあなたがたと和解し、御自身の前に聖なる者、きずのない者、とがめるところのない者としてくださいました。²³ただ、揺るぐことなく信仰に踏みとどまり、あなたがたが聞いた福音の希望から離れてはなりません。この福音は、世界中至るところの人々に宣べ伝えられており、わたしパウロは、それに仕える者とされました。

²⁴今やわたしは、あなたがたのために苦しむことを喜びとし、キリストの体である教会のために、キリストの苦しみの方けたところを身をもって満たしています。²⁵神は御言葉をあなたがたに余すところなく伝えるという務めをわたしにお与えになり、この務めのために、わたしは教会に仕える者となりました。²⁶世の初めから代々にわたって隠されていた、秘められた計画が、今や、神の聖なる者たちに明らかにされたのです。²⁷この秘められた計画が異邦人にとってどれほど栄光に満ちたものであるかを、神は彼らに知らせようとされました。その計画とは、あなたがたの内におられるキリスト、栄光の希望です。²⁸このキリストを、わたしたちは宣べ伝えており、すべての人がキリストに結ばれて完全な者となるように、知恵を尽くしてすべての人を諭し、教えています。²⁹このために、わたしは労苦しており、わたしの内に力強く働く、キリストの力によって闘っています。

【福音書日課】マルコによる福音書 14章26～42節

²⁶一同は賛美の歌をうたってから、オリーブ山へ出かけた。

²⁷イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたは皆わたしにつまずく。

『わたしは羊飼いを打つ。すると、羊は散ってしまう』

と書いてあるからだ。²⁸しかし、わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く。」²⁹するとペトロが、「たとえ、みんながつまずいても、わたしはつまずきません」と言った。³⁰イエスは言われた。「はっきりしておくが、あなたは、今日、今夜、鶏が

二度鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう。」³¹ペトロは力を込めて言い張った。「たとえ、御一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません。」皆の者も同じように言った。

³²一同がゲツセマネという所に来ると、イエスは弟子たちに、「わたしが祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。³³そして、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを伴われたが、イエスはひどく恐れてもだえ始め、³⁴彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい。」³⁵少し進んで行って地面にひれ伏し、できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈り、³⁶こう言われた。「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」³⁷それから、戻って御覧になると、弟子たちは眠っていたので、ペトロに言われた。「シモン、眠っているのか。わずか一時も目を覚ましていられなかったのか。」³⁸誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い。」³⁹更に、向こうへ行って、同じ言葉で祈られた。⁴⁰再び戻って御覧になると、弟子たちは眠っていた。ひどく眠ったのである。彼らは、イエスにどう言えばよいのか、分からなかった。⁴¹イエスは三度目に戻って来て言われた。「あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。もうこれでいい。時が来た。人の子は罪人たちの手に引き渡される。」⁴²立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た。」

眠る者の傍らで【こども説教のために】

主イエスが弟子たちと祈りを共にされたのは、十字架につけられる前の晩のことでした。最後の食事を終えられると、主イエスは弟子たちを連れてオリブ山に向かわれ、ゲツセマネという所で祈られたのです。特に、ペトロ、ヤコブ、ヨハネの三人をすぐ傍らに伴われて、主イエスは祈られました。

そのとき、主イエスは、まもなくご自分のもとから離れて行ってしまう弟子たちのために祈られたのです。弟子たちは、ガリラヤの町や村で出会って以来、ずっと主イエスと共に旅をしてきた者たちです。旅の間、肉親の家族よりも親しく過ごしてきました。主イエスは、その弟子たちのことを「わたしの兄弟、姉妹、また母」（マルコ 3:35）とお呼びくださったのです。固い絆で結ばれていると、弟子たちも思っていました。だから、「たとえ、ご一緒に死なねばならなくなっても」離れたりはいしない、とさえ言っていたのです。

けれども、その弟子たちがまもなく離れて行くことを、主イエスはご存じでした。一人残らず主イエスのことを見捨ててしまうだろうことを、知っていました。それは、主イエスにとって深い悲しみであり、苦しみだったことでしょう。そんなことにならないでほしいと、主イエスは願いましたが、そうなることを受け入れねばならないこともご存じでした。

主イエスが祈られる傍らで、弟子たちは眠ってしまっていました。何度起こしても、目覚めていられませんでした。それでも、主イエスは、弟子たちの傍らで祈られました。ご自分を見捨てて離れて行くであろう弟子たちが、再びご自分の姿を見るようになる日が来ることを信じて、祈られました。

皆つまずく

今日の主日を、有志の皆さんは沖縄の教会で迎えるはずでした。三月に石神井教会から送り出した出身教職・榊原かをる師の仕える読谷教会を訪問する計画が立てられていたのです。ところが、台風の接近により、直前になって中止になってしまったのです。再会のために準備してこられた皆さんの落胆は小さくないことでしょう。とは言え、何らかの形であらためて計画を立て直して、再会を果たしてくださるのではないかと期待しています。もっとも、のんびりしていると、榊原師が帰京されての再会のほうが先になってしまうかもしれません。

わたしたちは、普段意識をしていないかもしれませんが、日曜日ごとに教会堂に集まり、一つの礼拝にあずかることを通して、繰り返し、離れては再会するという経験を重ねています。礼拝の終わりに告げられる「派遣と祝福の言葉」は、ここから送り出された者が、一週の道のりを主に守られて歩んだ後、再び呼び集められて来ることを期しています。

現実には、一週の旅路で戻って来ることがかなわず、数週間、あるいは数カ月の旅を経て、ようやく帰還を果たし、再会がかなう、という方も少なくありません。いいえ、実のところ、少なくない方が、かつてここから送り出されたまま、長い期間戻って来られていないのです。

それぞれの生活の事情から、戻って来ることがかなわなくなっている方があるのでしょう。日々の仕事やご家族のことで、日曜日の朝、自由が利かない生活になることもあるのです。むしろ、わたしたちが気がかりなのは、そういう事情があるわけではないのに、戻って来ることができなくなっている方のことです。ここ教会で互いに再会することを拒ませる何かがあつてのことだとすれば、それは、当人だけの問題で終わりません。お互いが、再会のために必要な和解を果たさなければならぬはずだからです。

族長ヤコブは、二十数年ぶりに双子の兄エサウとの再会を果たそうとしていたのです。しかし、それは簡単なことではありませんでした。彼は、かつて父からの祝福のことで兄と争い、家を出て行っていたのです。「あの時、兄は怒り狂っていた。今も、兄の怒りは収まっていないかもしれない。どんな態度で兄の前に進み出たらよいだろうか」と、彼は葛藤していたのでしょう。かつて自分が兄に対してしたことが、脛の傷のようにうずいたのでしょう。

使徒ペトロは、自分が主イエスのことを見捨てて離れるようなことは決してない、と考えていました。けれども、主イエスの目にはすでに、離れて行く彼の姿が見えていました。不本意ながら三度も「知らない」と言っしまい、酷く後悔するペトロの姿が見えていました。しかし、そのことを悲しみ、苦しめている主イエスの祈りを、ペトロは受けとめきれませんでした。

完全な者となるように

8月の主日礼拝に取り入れている「平和の挨拶」で、わたしは、式文には無い言葉を加えて皆さんに挨拶を促していました。「前後左右の方と互いに顔を向き合わせて、平和の挨拶を交わしましょう」という言葉です。式文では、ただ説明書きとして「会衆は平和と和解のしるしとして、握手やお辞儀によって、挨拶を交わす」とされています。

族長ヤコブは、ヤボクの渡し場で一晩中、何者かと格闘したとき、「わたしは顔と顔とを合わせて神を見た」のです。そのような近さで互いに取組み合いの格闘をしたならば、互いに傷を負わずにはいられません。実際、ヤコブはこのとき、腿を打たれて間接がはずれてしまったというのです。それでも、彼は「わたしは…なお生きている」と言いました。

互いに顔と顔とを合わせるような距離に立つことで、相手を傷つけてしまうこともあるかもしれません。しかし、互いのすべてを受け入れ合い、生きた存在として認め合うためにも、顔と顔とを合わせることは必要なのです。

ゲッセマネで祈られた主イエスは、弟子たちを傍らに伴われながら、孤独でいらしたのかもしれません。「目を覚まして祈っていなさい」と願っても、そうすることができずにいる弟子たちを見て、主イエスは、ますます孤独を深められていらしたのではないのでしょうか。そのときの主イエスが顔と顔を合わせて向き合うことのおできになる存在は、「アッバ、父よ」とお呼びするお方だけだったのかもしれません。

それでも、主イエスは、弟子たちを傍らに伴い続けられました。ご自身が絶望的な悲しみと苦しみの中でもなお御父と向き合われていたことを、弟子たちの記憶に残そうとなされたのでしょうか。いいえ、主イエスは、なお絶望せずに、傍らの弟子たちと向き合われていらしたのでしょうか。弟子たちと顔と顔を合わせ続けようとなさっていらしたのでしょうか。たとえ、彼らがそのことに気づかないままであっても。そのことによって、ただご自身だけが深い傷を引き受けられることになっても、そうなさったのでしょうか。そうすることによって、彼ら弟子たちと顔と顔を合わせるときが来ることを信じて。

わたしたちは、絶望的に、あの弟子たちのような存在にすぎません。顔と顔を合わせる距離にまで近づいては、主イエスを悲しませ、周囲の者を傷つけ苦しめています。無自覚のまま、そうしています、ペトロのように。互いに、そうしているのです。それでも、その悲しみを引き受け、傷つけた苦しみを引き受けて、顔と顔を合わせ続けようとしてくださるお方がいらしたのです。そのお方が、「あなたもそうするように」とお招きくださったのです。すべての者と再会を果たし、完全な者となるようにと、道をお拓きくださったのです。